

# 身体表現遊びを積み重ねることの意味

小 原 幹 代  
本 山 益 子  
杉 浦 慶 子

研究紀要第54号 抜粋

岡崎女子大学  
岡崎女子短期大学

令和3年3月15日発行

## 身体表現遊びを積み重ねることの意味

小原 幹代\* 本山 益子\*\* 杉浦 慶子\*\*\*

### 要 旨

身体表現遊びを苦手であると感じていた一人の保育者が、約14年間の保育の中で身体表現遊びの実践を積み重ねてきた。筆者はこの保育者が継続している背景に何があるのかを探りたいと考えた。そこで、本研究では、一年間の身体表現遊びの保育の中で、子どもの中にどんな力が育ったのかを検討することを通して、その継続の意味を探ることを目的とした。3歳児クラスの担任である保育者が、保育の中で様々な身体表現遊びを実践した映像を検討した結果、遊びを通して子どもたちが保育者との関係を築き、安心感や心の安定を得て、子どもたちの自己肯定感を獲得していく様子が見えてきた。身体表現遊びの特徴の一つである、どの表現も認められるということが自己肯定感の土台となっていき、他者とかかわっていく力や自分自身で表現することへの自信につながっていったと考えられる。そして保育者は子どもと体を通してかかわり、気持ちを受け止めていくことの重要性に気づいたことがうかがえる。また、身体表現遊びを通してヒトやモノとかかわり、共創することが、対象を捉え、感覚的に身体で表現する感性や創造性を育むことも推察された。

キーワード: 身体表現遊び、自己肯定感、感性の育ち、人とかかわり、共創

### I. はじめに

筆者は、40年に亘り保育者として身体表現遊びを実践し、その遊びを通して子どもたちの変化を実感してきた。また、身体表現遊びがもたらす子どもの変化や成長、保育者の育ちや学びを具体的な実践を通して検証してきた。

平成29(2017)年に改定された「保育所保育指針解説」においては、保育所保育に関する基本原則の中に、「安心感や他者に対する信頼感が得られる環境の下で自己を十分に発揮し、自発的・意欲的に活動が展開される中で、子どもの健全な心身は育まれていく」と定義されている。また、平成29(2017)年改訂「幼稚園教育要領解説」では、「幼児は毎日の生活の中で、身近な周囲の環境と関わりながら、そこに限りない不思議さや面白さなどを見つけ、美しさや優しさを感じ、心を動かしている。そのような心の動きを自分の声や体の動き、或いは、素材となるものなどを仲立ちにして表現する。幼児はこれを通して、感じること、考えること、イメージを広げることなどの経験を重ね、感性と表現する力を養い、創造性豊かにしていく。さらに自分の存在を実感し、充

実感を得て、安定した気分で生活を楽しむことができるようになる」<sup>2)</sup>ことが明記されている。身体表現遊びは、体を使って表現することや体を通してかかわっていくことで感性や表現力、創造性を豊かにすると考えられる。

岡崎女子短期大学では、創立当時より領域「健康」や領域「表現」の授業として身体表現遊びが教授されており、学生の感性の育ちや子どもとかかわる力の学びとなっている。学生時代から大学の授業の中でも身体表現遊びが苦手であると感じていた一人の保育者が、新任の時から身体表現遊びを積み重ねていくことで、この保育の必要性や重要性を感じ、実践を14年間継続し、積み重ねてきた。

今回、対象となる保育者が身体表現遊びを日々の保育の中で行い、それを一年間継続することで子どもの中の何が変化し、それがどんな力を育てることにつながっていったのかを検討することを通して、身体表現遊びを積み重ねてきた意味を保育者の実践の記録と保育者自身の振り返り、感想や思いを通して探っていきたいと考える。

\*岡崎女子短期大学 \*\*京都文教大学 \*\*\*岡崎女子短期大学付属幼稚園

## II. 研究方法

### 1. 対象

私立F幼稚園 3歳児 20名 (男8・女12)  
担任である経験年数14年目の保育者

### 2. 期間

2018年4月～2019年3月

### 3. 方法

#### (1) 年間保育における身体表現遊びの流れ

2018年度の日常保育の中での身体表現遊びと、身体表現遊びの研究保育について、日週案の記録を学期ごとに整理した。また、「2学期半ばの保育者の振り返り」の記録も検討した。

#### (2) 身体表現遊びの研究保育

一年間に6回、クラス全員で行った身体表現遊びの研究保育についてVTRに収録した。その映像を用いての実践の検討(テーマ・ねらい・子どもの姿・保育者の振り返り)を行った。

#### (3) 担当保育者へのインタビュー

2019年2月末に行ったインタビューの様子を録音し、その回答の内容の検討を行った。

[質問項目]

- ① 3歳児で身体表現遊びを行う理由は何か。
- ② 子どもの変化はどんなことで感じるのか。
- ③ 身体表現遊びの良さは何だと思うか。
- ④ 身体表現遊びではどんなことを意識しているのか。
- ⑤ この保育を通してどんな力が育ってほしいと思うか。
- ⑥ いろいろな年齢を経験していると思うが、この保育のねらいは年齢でどう変わっていくのか。

### 4. 倫理的配慮

対象者に対しては、研究の趣旨、個人情報の取り扱い等について説明し、同意を得られた場合に同意書に記入を求めた上で、研究保育のVTR収録、インタビューの録音を実施した。

## III. 結果及び考察

### 1. 身体表現遊びの年間保育の流れと保育実践

#### (1) 身体表現遊びの学期ごとの内容と研究保育

日常保育の中で行った身体表現遊びの内容を学期ごとにまとめ、学期の中で行った研究保育は、日にちとテーマを表示した(表1)。研究保育の詳細について

は(表2の1・表2の2)に示す。

#### (2) 学期ごとの内容についての考察

表1より、学期ごとの子どもの姿や身体表現遊びのねらいについて考察したい。

##### ① 1学期

1学期は、10分～20分ほどの短い時間で遊び、同じ内容を2回～3回繰り返して行われている。マットを使った変身ごっこや音楽を用いてのリズム遊びや体操を取り入れている。保育者は、入園してから不安を感じている子どもの心が安定し、保育者という存在に安心してかわることができるように、身体表現遊びを多く取り入れようとしていることが表3の①の「3歳児で身体表現遊びを行う理由は何か？」の質問の回答からもうかがえる。心が動く、楽しい時間や場を共有できるように、子どもに親しみのある歌や手遊び、体操をきっかけとして取り入れ、動くことや表現することが楽しいと感じられるものを実践していることが読み取れる。その保育のなかで、どんな表現であっても保育者がまるごと受け止めてくれていると感じることができる雰囲気をつくり出していると推察する。この環境づくりにより、子どもの心は、不安から安心へと変化し、やがて自己表出し、自己発揮する姿が現れ、自己肯定感の土台へとつながっていくことが予想される。

子ども一人一人との信頼関係構築を目的として、日々の遊びに身体表現をたくさん取り入れて計画していることがうかがえる。この身体表現遊びには、直接先生に触れてもらうという愛着行動からの安心感の蓄積や、同じ場でみんなと遊ぶことで、模倣し、子ども同士が刺激し合うことが推察される。そして、子どもとの信頼関係をつくることで、「自分で動いてみたい」、「体を動かしてみると楽しい」と感じ、子ども自身が主体的な気持ちや身体を獲得していき、表現する喜びや楽しさを感じるようになっていくと推察する。

##### ② 2学期

2学期は、1学期に得た自己肯定感を土台にして子どもの行動範囲や遊びの幅も広がってくる。2学期ならではの充実した自然環境や興味ある社会的環境で体験する遊びを題材にした身体表現遊びが実践されていることがわかる。遠足や園外保育での出会いや、園内での年長児や年中児との縦のかかわりを経験し、自発的に模倣し、表現を楽しむ遊びも出てきている。年長児の遊びを見て真似をして始まった「ショーごっこ」は、衣装を着て歌ったり、ヒーローが現れて〇〇マンになりきったりして表現している。「サンタクロースごっこ」は、衣装や帽子、プレゼント袋などでサンタクロースになり

表1 身体表現遊びの学期ごとの内容と研究保育

1学期の実践(4月・5月・6月)	2学期の実践(9月・10月・11月・12月)	3学期の実践(1月・2月・3月)
<p>・動物になつてのマット遊び(ウサギ・カエル・イモムシなど)</p> <p>・走って止まる(大きくなる・小さくなる・脱力 パチン・好きなポーズ)飛行機・バス</p> <p>・小さくなって大きくなって</p> <p>・伸びて縮んで</p> <p>・パンダなりきり体操(まねっこ遊び)</p> <p>・むすんでひらいて(変身あそび)</p> <p>・卵にな〜れ(青虫・ちょうちょ・ダンゴムシ・恐竜)</p> <p>・動物ごっこ(犬・ねこ・カエル・へビ・うさぎ・ゴリラ・ぞう・アヒル)</p> <p>※2回〜3回と繰り返し実践されている。</p>	<p>・走って止まる(ピタッと止まる・強いポーズ)</p> <p>・卵の中から(オタマジャクシ・カエル・へビ・バッタ・トンボ)</p> <p>・動物ごっこ(ワニ・カエル・ライオン・恐竜)</p> <p>・お風呂ごっこ(森のお風呂屋さんの劇的表現)</p> <p>・ショーごっこ(衣装を着て踊る)</p> <p>・サンタクロースごっこ</p> <p>・かわりっこ(いろいろなものに変身して移動し、椅子に座る)</p> <p>※2回以上行ったものや、2週間ほど毎日続いた実践もある。</p>	<p>・ゴーストストップ(うれしいポーズ・悲しいポーズ・かっこいいポーズ・好きなポーズ)</p> <p>・新聞紙を豆に見立てての豆まきごっこ</p> <p>・いろいろな鬼の表現遊び</p> <p>・「さんぽ」の曲に合わせて散歩し、いろいろな動物に出会い、表現する。</p> <p>・いろいろな乗り物に乗って出かける。</p> <p>行きたい所で出会ったものを表現する。</p> <p>(遊園地・海・動物園・水族館など)</p> <p>・「たきび」の曲のイメージから友だちと焚火にあたる表現やみんなでおしくらまんじゅうをする。</p> <p>※2回〜3回と繰り返し実践されている。</p> <p>一つのテーマでクラス全体が40分ほど集中して遊ぶ姿も見られる。</p>
<p>研究保育①5/25 テーマ「むすんでひらいて」</p> <p>研究保育②6/22 テーマ「たまごのあかちゃん」</p>	<p>研究保育③11/2 テーマ「バスごっこ」</p> <p>研究保育④12/14 テーマ「おもちつき」</p>	<p>研究保育⑤1/18 テーマ「ハンカチの洗濯」</p> <p>研究保育⑥2/22 テーマ 絵本「もこもこもこ」</p>

表2の1 一年間に6回行った研究保育の実際（5月・6月・11月分）

<p>① 5/25「むすんでひらいて」          &lt;ねらい&gt;          ・先生や友達と一緒にいろいろなものに変身して身体を動かす楽しさを感じる。          ・先生と一緒に動いたり、真似したりして触れ合うことを喜ぶ。</p> <p>&lt;子どもの姿&gt;          ・むすんでひらいてからウサギや飛行機、恐竜などに変身する。          ・先生や友達の姿を見たり、同じ動きをしたりして、先生の声を真似しながら動きを楽しんでいる。          ・子どもから電車やカエルが出てきて、子ども同士がつながる姿があった。          ・「ニンジンがこっちにもあるよ」「私はツバメ」などの言葉も出てきてなりきって表現する姿があった。          ・走ったり跳んだり止まったりするのが楽しく、問いかけてもまだ、発言は少なく、先生や友達の真似をして楽しんでいる。</p> <p>&lt;保育者の振り返り&gt;          ・このテーマは2回目で繰り返し楽しんでいるので自然といろいろなものに変身しやすかったと思う。担任の声をまねしながら同じ動きを楽しんでいる子どもが多く、一体感を感じることができた。          ・子どもから出てきた言葉は否定せず、肯定的に捉え、受け止めて言葉を返すようにした。子どもたちにもっと触れたり、やりとりを多くしたりすると良かったかなと思った。          ・今回は、いろいろな物に変身する楽しさを味わってほしいと思い、一つの表現は短めにした。私自身とても楽しんでできた。</p>	<p>② 6/22「たまごのあかちゃん」          &lt;ねらい&gt;          ・いろいろなものに変身して体を動かす楽しさを感じる。          ・先生や友達と一緒に動いたり触れ合ったりする楽しさを味わう。</p> <p>&lt;子どもの姿&gt;          ・「卵になあれ！」という声かけに反応して身体を丸くする姿があった。保育者が問いかけると生まれるものをイメージして答えている。          ・卵の表現も細長い卵やおしりを上に伸ばして大きさを表現している姿などさまざまな姿があった。          ・先生に卵を温めてもらったり、えさをもらったりして触れ合うことを喜んでいく。          ・カエルの表現はクラスで飼っていて直接触れたことがあり、体験からの表現が出ていた。(跳び方・逃げる様子・鳴き方)          ・保育室にもどってから、最後に表現した自分の好きなものになりきっている子どもの姿が多かった。</p> <p>&lt;保育者の振り返り&gt;          ・卵から何かが生まれるという表現を繰り返し行って楽しめばよかったが、展開させなければという気持ちが先走ってしまった。          ・子どもの自由な表現を認め、体に触れるようにした。          ・保育室に戻ってから楽しさが持続していると感じた。          ・まだ、イメージが湧きにくいところもあるなと感じたので、生き物を見たり、実際に触れたりし、絵本・紙芝居などもたくさん読んでいきたい。</p>	<p>③ 11/2 「バスごっこ」          &lt;ねらい&gt;          ・先生や友だちと一緒に動いたり、やり取りを楽しんだりする。          ・自分の思いや感じたことを表現する楽しさを感じる。</p> <p>&lt;子どもの姿&gt;          ・直前に映画館ごっこで遊んでいたため「どこについたかな？」という問いかけに「映画館！」と言う子どもが多かった。          ・神社や公園等子どもが身近に遊びに行っている場所が出てきて、保育者の予想とは違った展開となった。          ・バスに乗って「動物園へ行こう」と保育者が提案することでいろいろな動物が出てきた。          ・動物になって散歩をしたり、ご飯を食べたりする表現が出てくる。          ・保育者との言葉のやり取りを楽しんでいて、経験したことを言葉で伝えたり身体で表現し動いたりしている。</p> <p>&lt;保育者の振り返り&gt;          ・保育者が予想した「動物園」「水族館」というイメージがなかなか出てこなかったが、時には保育者が提案をして進めていくことも大切だと思った。そうすることでイメージの広がりが生まれたと思う。          ・子どもたちから出てきた言葉はできるだけ受け止めたいと思ったため、一人一人に言葉をかけるようにした。          ・「バスごっこ」は大好きで、乗り物だけの表現遊びやバスに乗ってその過程を表現した遊びもしていきたいと思う。</p>
---	---	---

表2の2 一年間に6回行った研究保育の実際(12月・1月・2月分)

<p>④ 12/14 「おもちつき」          &lt;ねらい&gt;          ・おもちになって先生や友だちと一緒に体を動かすことを楽しむ。          ・自分の思いや感じたことを表現する楽しさを感じる。</p> <p>&lt;子どもの姿&gt;          ・前日におもちつきをしたという経験からイメージして、おもちになって伸びたり丸まったりしている。杵が触れると手や足を上に伸ばしもちが伸びることを表現している。          ・友だちの動きを見て真似をして手や足を伸ばすことを楽しんでいる。          ・保育者に触れてもらうことを喜び、待っている様子がうかがえ、おもちになって表現することを楽しんでいる。</p> <p>&lt;保育者の振り返り&gt;          ・流れは頭の中にあっただが、もちつきの一つ一つの表現をじっくり表現することができなかった。印象がなかったかもしれない。          ・全体的に動きがずっと同じで変化があまりなかった。広い場所での動きを楽しむことができると良かった。          ・食べられて触れてもらうことが嬉しく、同じ表現になってしまった。          ・子ども一人一人の体に触れてスキンシップをとることを意識したが、それは達成できたと思う。          ・保育者のイメージをもっと豊かにすることと、もっと思い切り動いて一緒に楽しむことができるようにしていきたい。</p>	<p>⑤ 1/18 「ハンカチの洗濯」          &lt;ねらい&gt;          ・全身を使ってハンカチになりきり、洗ったり干したりすることを楽しむ。          ・自分の考えたことや感じたことを表現する楽しさを感じる。</p> <p>&lt;子どもの姿&gt;          ・洗濯して干しても「しわしわになっちゃった」と言って、また、くしゃくしゃのハンカチの表現をして「しわしわ～」と楽しんでいる子どももいた。          ・洗濯の表現は大きく回って走ったり、その場でくるくる回ったりといろいろな表現が見られた。          ・動きたい欲求からずっと走り回る表現で楽しんでいる子どももいた。          ・洗濯されたり、手や足の先まで伸ばしたり曲げたりしてハンカチを表現していて自分なりに考えたことを体で表現しようとしている。          ・洗濯物になりきっている子は、保育者にゴシゴシと体を洗ってもらうことを喜んでいて、干す場面では、友だちと手をつないで前後に風に揺れている様子を表現していた。</p> <p>&lt;保育者の振り返り&gt;          ・ずっと走り回っている子どもに対して、何とか保育者の方へ気持ちがあかないかと焦ってしまった。しかし、保育室へもどる途中に「くるくるの洗濯楽しかったね！」と言う子どももいたのでその子なりに表現を楽しんでいたのだと思った。          ・実際に洗濯をした経験がなかったため、初めにハンカチに触れ、洗濯遊びを経験してから身体表現遊びをしないと、もっと表現が膨らんでいたのではないかと思った。</p>	<p>⑥ 2/22 「もこ もこもこ」          &lt;ねらい&gt;          ・擬音を楽しみ、自分なりに感じたことを身体で表現する楽しさを味わう。          ・広い場所で体を動かす楽しさを味わう。</p> <p>&lt;子どもの姿&gt;          ・「もこ」「ぷー」「によき」などの擬音を聞き、大きくなったり小さくなったり身体を自由に動かしている。          ・上に伸びる動きが多かった。          ・「そと」「もこ」「ふわん」等の言葉も感じて手を広げゆっくりと表現する姿もあった。          ・「のびる」「ちぢむ」も友だちの表現に刺激されてやってみたり、先生に見て欲しくて動いたりしている。</p> <p>&lt;保育者の振り返り&gt;          ・言葉を感じて表現するという保育者自身が苦手なテーマであり、展開をどうしようかと考えすぎてしまった。そのため、ゴーストアップも中途半端に終わってしまい、子どものポーズや工夫している姿をほとんど取り上げていなかったのが反省点である。          ・子どもが音を感じてどのように表現するのか見てみたいと思ったが、子どものイメージが薄く、保育者がもっと表現して身体の動きを一緒に楽しむことができるとよかった。          ・前回のことを思い出して、「洗濯やろう」という声が出て、予想しない子どもの姿に戸惑ってしまった。どのように進めていくのか迷いもあったが、子どもの思いも受け止めるとよかったと思う。</p>
--	---	---

プレゼントを配りに行くという遊びになった。「森のお風呂屋さん」の絵本からは、お風呂ごっこが始まり、ストーリーを表現する劇的な遊びへと発展させている。身体表現遊びが一つの契機となり、さらに「自分でする」ことへの自信を身につけていったと思われる子どもは、生活のすべての場面で自己主張や自己発揮し、より意欲的に生活を営むことができるようになっていくと推察される。

### ③ 3 学期

3 学期は、2 学期に主体的に遊んだことや積み重ねられた経験から自信もつき、模倣から次の段階へと進み、自分の表現を工夫してみることをねらいとした身体表現遊びを多く取り入れていることがわかる。また、単発の表現ではなく、一つのストーリーのあるイメージの世界で 40 分以上身体表現遊びを楽しむ姿もあり、その空間のなかで人とかかわることやイメージを体で表現する楽しさや工夫をねらいとして実践していることがうかがえる。これは、身体表現遊びを通して人とかかわることで、人への信頼感の土台となる感情を積み重ね、遊びで生まれるアイデアや工夫が遊びへの意欲となり、思考力や創造力を育てていくのではないかと推察する。

西(2009)<sup>9)</sup>は、「子どもは、毎日の保育や遊びのなかで、まわりにあるさまざまな物や、同年代のともだち、家族や保育者といった大人たちと、からだで豊かにかかわりながら育っていきます。子どもの言葉による表現は、誰もがそうであったように、未発達なところが多いものです。だからこそ、子どもたちにとっては、からだで表現することで周囲の人々と深くつながったり、イメージを共有しながら遊んだりすることが、とても大きな意味を持つわけです。」と記述しているように、言葉が未発達な 3 歳児にとっては、体を使って表現し、それが伝わったことの喜びや記憶が、子ども自身の自己開示や自己発揮につながっていったと推察される。子どもの表現や思いを受け止めていく保育者の姿勢やこころもちによって子どもの表現する場や機会が増えてきたことが予想される。何よりも身体表現遊びの経験が「伝えたい、聞いてほしい、わかってほしい」という子どもの思いの発信の根源になっていったと考えられる。

#### (3) 2 学期半ばの保育者の振り返りからの考察

2 学期半ばに、保育者に今までの子どもの様子や実践の振り返りを記録用紙に記録してもらった。この記録用紙から記述を引用して考察したい。

「入園当初、表情がとても硬く、保育者から話しかけても無表情で反応がなく、笑顔が少なかった子どもが、身体表現遊びをするなかで、自然に笑顔が出るように

なった。また、子どもの方から話しかけてくることがとても多くなった。」という記述があり、身体表現遊びのなかでは、子どもの表情がみるみる変化し、緊張や不安から解放されていく様子を保育者は感じたことがうかがわれる。その結果、たくさん保育者に話しかける子どもの姿があり、心を開いて親しみを感じてきたことを実感したと推察する。

「初めは、恥ずかしさや不安、緊張から自信が持てず、参加しない子どもがいたが、2 学期以降はクラスの全員が参加し、表現を楽しむ姿が見られるようになった。」とあり、身体表現遊びの安心感や楽しさを子どもが実感し、伝播していったことが予想される。クラス全員が同じ場で楽しむ一体感を感じていると推測する。

「保育者自身が、ありのままの子どもの姿を受け止めることが子どもの心の安定につながると感じたため、子どもの思いや仕草、表現などをできる限り認め、決して否定しないよう心がけてきた。子どもたちは受け止めてもらえるという安心感から自分のやりたいこと、なりたいたいのを伝えてくる姿が増えてきた。身体表現遊びにおいてだけでなく、生活面でも他の遊びでも、見て欲しいというサインをたくさん出すようになった。」という記述があり、身体表現遊びを通して、子どもを見ようとし、ありのままの子どもの姿を受け止めようとする姿勢が子どもに安心感を与え、遊びや生活への意欲を引き出していったのではないかと推察する。

## 2. 研究保育の実際と考察

表 2 の 1 と表 2 の 2 は、一年間に 6 回行った研究保育について「日付」「テーマ」「ねらい」と主な「子どもの姿」「保育者の振り返り」を表にまとめたものである。テーマやねらいは事前に保育者が立案した指導計画から抜粋した。子どもの姿は、映像から主な子どもの姿を抽出し、「保育者の振り返り」については実践後に担当保育者が記録した記録用紙から抽出した。

これらの表 2 より、以下、研究保育の「ねらい」について考察したい。また、「子どもの姿」と「保育者の振り返り」については双方を関連付けて考察する。

### (1) 研究保育のねらいの考察

表 2 より 1 学期は、体を動かす楽しさを感じることや、先生の真似をしたり触れ合ったりすることを喜ぶことがねらいとなっている。これは、保育者や園生活の場が安心して存在や場になるという願いを含んでいると考えられる。

6 月頃から 2 学期、3 学期にかけては、子ども同士が交わる姿を予想し、模倣して遊ぶことや体を動かす楽しさや面白さを一緒に感じることに重点を置いていると推

察する。「先生や友達と一緒に」という言葉や「表現する楽しさややり取りする楽しさ」という言葉がねらいに含まれるようになり、指導計画通りに行くことよりも、子どもとの言葉や表現の生のやり取りを重視していることがうかがえる。「感じる」「味わう」「表現する楽しさ」というねらいにある言葉からは、表現の質の評価ではなく、表現すること自体が子どもの心を開放していく遊びであることを踏まえ、「安心」「安定」をキーワードとする3歳児の一年間のねらい達成の手段として、身体表現遊びを位置づけていることが推測される。

## (2) 子どもの姿と保育者の振り返りの考察

「子どもの自由な表現を認め」や「子どもたちから出てきた言葉はできるだけ受け止めたいと思った」という記述が研究保育②や③の保育者の振り返りにあり、身体表現遊びでは、何物にも拘束されることなく、思い切り自由に動ける楽しさや受け止めてもらえる喜びを感じる場となり、子どもの心を開放し、自己発揮につながっていくことが推察される。慣れ親しんだ歌や手遊びからの表現は流れもスムーズで「私自身とても楽しんでできた。」と研究保育①の振り返りに記述があるように、保育者自身も子どもの思いを感じ、見通しを持って楽しんで実践していることがうかがわれる。また、「たまごになあれ」「くしゃくしゃのハンカチになあ〜れ」などの言葉を感じて体で表現する姿は、まだ、子どもの発言は少ないものの、心が動いて表現している瞬間であると捉えられる。感じて表現することの積み重ねが、イメージした世界に入って表現する力につながっていき、2学期以降は、自ら考えて表現し、保育者に認めてもらうことをアピールする姿も見られるようになってくる。テーマによっては、子どもの表現の様子からそのイメージを生み出す経験が不足していることを察知し、いま、子どもにとって、必要な体験は何かを知ることができ、環境の構成や直接体験の保育(種まき)につなげることを意識していると考えられる。②の振り返りにある「まだ、イメージが湧きにくいところもあるなと感じたので、生き物を見たり、実際に触れたりし、絵本、紙芝居などもたくさん読んでいきたい。」、また、⑤の振り返りには、「洗濯遊びを経験してから身体表現遊びをすると、もっと表現が膨らんでいたのではないかと思った。」との記述からは、自然に触れることで培われる感性の育ちや実体験することで得られる感覚や感触をイメージし、表現に変えていく力など、生活の中で子どもにとっての必要な経験が何なのかを振り返り、検討していることが読み取れる。

これは、経験に裏付けされた表現の形であり、創造性の基盤になる部分であると保育者は理解し、その必

要性を益々感じていることが予想される。子どものその時の声を聞き、その時の子どもの「あらわれ」を受け止めることの大切さに気づいたことが推察される。

また、⑥の絵本『もこもこ』の研究保育では、「保育者自身が苦手なテーマであり、展開をどうしようと考えすぎてしまった。そのため、(中略)子どものポーズや工夫している姿をほとんど取り上げていなかったのが反省点である。」「保育者がもっと表現して身体の動きを一緒に楽しむことができるようになった。」の記述のように保育者自身が苦手だと感じているところを自覚し、もっと身体を自由に動かして、子どもと一緒に感じて動くということを楽しめるようにしていきたいという保育者の思いが感じられる。

西(2009)<sup>4)</sup>が、「人や物とかかわる際の、子どもと大人のこうした違いに着目するとき、私たちは、大人である保育者が、豊かな身体性をもつ子どもとの間に親密な共同世界をつくりだすためには、子どもたちの“からだ”から発信されるメッセージそのままを“からだ”で受け取り、そして自分の“からだ”からも、さまざまなメッセージを送ることが大切になることに気がつきます。」と述べているように、身体表現遊びを継続することにより、保育者自身が自分の体で受け止め、体で表現して送ることの大切さに気づき、それを課題として捉えていることがうかがわれる。自ら感じて理解はしているものの、子どもに送ることのできる柔軟な心と体が、まだ不足していることを実感した記述ではないかと考えられる。

次第に、3歳児が他者の存在に気づき、一緒に遊びたい思いや一緒にすることの喜びを感じられるようになる姿が出てくるが、保育者の意図と異なった場合や予想しないことが起きた場合として、⑤の振り返りには、「ずっと走り回っている子どもに対して、何とか保育者の方へ気持ちが向かないかと焦ってしまった。保育室へもどる途中に『クルクルの洗濯楽しかったね!』と言う子どももいたので、その子なりに表現を楽しんでいたのだと思った。」とあり、また、⑥の振り返りには「予想しない子どもの姿に戸惑ってしまった。どのように進めていくのか迷いもあったが、子どもの思いを受けとめるとよかったと思う。」と記述があり、改めて、子どもの表現を「まるごと受け止める」ことの難しさを感じていると考える。これは、保育者と子どものイメージや表現の違いであり、体を使って表現すること、体感することが3歳児にとっては結果ではなく、過程であることを物語っていると推測する。つまり、子どものそうしたいという意欲の表れは、表現することが目的ではなく、あくまで、通過点であり、その過程としての身体表現の重要性は、発達を促す過程として捉えることが望ましいと考える。



河邊(2015)<sup>9)</sup>は、山田(1994)<sup>9)</sup>が『遊び論研究』の中でまとめた遊びに『なる』条件として3点を挙げ、以下のようまとめている。

- 「・その活動が、その活動の主体にとって楽しいこと
- ・主体にとっては、その楽しい活動自体が目的であって、少なくともその活動が、その外部にある他の目的達成のための単なる手段としての性格をもてばもつほど、その活動は『遊び』の核心から遠ざかること
- ・外部から強制され拘束されている、という感じを主体がもたず、要求、意思に基づいて行っている活動であるという感じを主体が持っていること

『何かのため』という手段ではなく(非手段)、それが面白いから(内的動機)自ら取り組む(主体性)活動が、遊びとして『なる』条件であるという。」と述べている。身体表現遊びは、「遊び」の本質として、この条件を満たしており、遊びによって「幼児は心身全体を働かせ、様々な体験を通して心身の調和のとれた全体的な発達を築いていくのである」と「幼稚園教育要領解説」<sup>7)</sup>には遊びを通して育つ意味が記述されている。

### 3. 保育者へのインタビューより

表3の保育者のインタビューの回答から、身体表現遊びの必要性について考察したい。

インタビューの①の質問である「3歳児で身体表現遊びを行う理由は何か?」の回答には、「子どもの心が安定した状態で行動に移していくためには、不安を安心に変え、自信につなげる保育が必要だと感じる。(中略)しかし、単にスキンシップをとればいいというのではなく、言葉や表情、表現を通して子どもを丸ごと受け止めていくことになる。」とあり、この回答では、身体表現遊びによって、保育者の意識が子どもの言葉や表情、表現など全ての表出に向けられ、それを受け止めていくことが子どもの心に生まれる安心感につながると保育者は実感していると推測される。それは体を使ってスキンシップをとるだけでは得られない気持ちや言葉、表現のキャッチボールの重要性であり、心の安定感や表現する喜びが、子どもの主体的で意欲的な生活の基礎となっていくことを経験から見通していると推察する。子どもが感じた言葉や表現を保育者が受け止めた上で、何を選択していくのかを考え、投げかけていくことで子どもが考えたり発言したりする言葉のキャッチボールを大切に楽しむ姿勢が実践の映像からも垣間見える。一見、言葉のやり取りに見えるが子どもと気持ちや思いのキャッチボールをするという保育者側のねらいがあるのではないかと予想される。

次に、③の質問である「身体表現遊びの良さは何だと思うか?」の回答には、「身体表現遊びは保育者と子どもの心を開放する遊びであり、また、友だちの姿に刺激を受け、友だちの良さに気づくことができる。見て欲しい自分を表現し認めてもらう喜びを感じることができる。」とあり、保育者自身も心を開放して、『させる保育』から転換し、子どもと共にワクワクするような共創の世界を作り出すことの楽しさを感じているのではないかと推測する。身体表現遊びがみんなと一緒にすることで得られる刺激や影響が他者を認める力になり、それは協同性の基礎になると感じていることが推察される。子どもの生きる推進力となるものが、自分の表現したものを認められる喜びであることも日々の子どものかかわりから実感しているであろう。

また、④の質問である「身体表現遊びでは、どんなことを意識しているのか?」の回答には、「子どもの表現を否定的に見ないように意識している。違うものになっても尊重して、汲み取っていく。なぜ、それなのかと考えるようにしている。」とあり、表現する姿から子どもを理解しようとする保育者の姿勢が見え、この姿勢も子どもに安心感や信頼感を植え付けていくことにつながり、保育者自身も子ども理解が深まっていくのではないかと推察される。また、「このやり取りがイメージづくりにつながっていくので、それも意識している。」という言葉からは、身体表現遊びの中で子どもと言葉や思いのキャッチボールをすることが、イメージを育てることになっていくと実感していることも推察される。

## IV. まとめと今後の課題

子どもたちは、身体表現遊びの積み重ねの過程において、自らの考えや表現を認められることを実感し、安心感や自己肯定感を獲得していくことがうかがえた。そして、これらにより他者とかわり、相手の良さを見つける信頼関係を生み出す基礎が培われるのであろう。

古市(2010)<sup>8)</sup>は、『『他者の動きも同じ動き』』というのが、無意識のうちに模倣しつつ、それが身体の中で記憶され、再現されていくことを示している。そして、身体の動きも言葉と同じように、ごっこ遊びにおけるイメージの表現の伝播、共有を支えていることを示した。」と述べているように同じ空間(場)やシチュエーションにおいて表現することの喜びや自分の表現を認められることが他者に伝播し、共有という形になると考えられ、イメージの世界においては、共創という形に変化していくことも予想される。そして、この共創の場は、「からだとかからだを共

表3 保育者へのインタビューの記録（2019年2月末）

質 問	回 答
① 3歳児で身体表現遊びを行う理由は何か？	<p>3歳児は、初めての集団生活で、入園後は、とても不安で緊張もしている。子どもの心が安定した状態で行動に移していくためには、不安を安心に変え、自信につなげる保育が必要だと感じる。保育者が子どもに触れる、子どもが保育者に触れて体でかかわることは、喜びであり安心していくのでスキンシップを行っている。しかし、単にスキンシップをとればいいというのではなく、言葉や表情、表現を通して子どもを丸ごと受け止めていくことになる。身体表現遊びを一緒に楽しむことで子どもの表情がみるみる変わっていく。緊張がほぐれて、不安な思いが消えていく様子がわかる。それで、できるだけ身体表現遊びを行うようにしている。保育者もそれを一緒に楽しむようにしている。</p>
② 子どもの変化はどんなことで感じるのか？	<p>緊張していて不安だと自己表現が少ないが、身体表現遊びを何度か行うことで、子どもの発言が増え、保育者にアプローチしてくるが増えてくる。もっと自分を出してほしいと思う。</p>
③ 身体表現遊びの良さは何だと思ふか？	<p>身体表現遊びは保育者と子どもの心を開放する遊びであり、また、友だちの姿に刺激を受け、友だちの良さに気づくことができる。見て欲しい自分を表現し認めてもらい喜びを感じることができる。</p> <p>安心して遊びを楽しめるようになり、こちらから投げかけるようにしていくと、投げかけたことを表現したり、真似をしたりしていく。少しずつ、自分で言っていた、表現していたと思うようになり、発言し、表現して見せるようになる。自分を出すことができ、自分で考えているんだなど感じる表現が出てくる。</p>
④ 身体表現遊びでは、どんなことを意識しているのか？	<p>子どもの姿を見逃さないようにしようと、また、子どもの言葉も聞き逃さないようにしようと意識している。子どもとのやり取り、言葉のキャッチボールは、テンポや間が大切だと思うので気を付けている。このやり取りがイメージづくりに繋がっていくので、それも意識している。他の子どもも意識できるように子どもの言葉を復唱するようにしている。</p> <p>あと、子どもの表現を否定的に見ないように意識している。違うものになっても尊重して、汲み取っていく。なぜ、それなのかと考えるようにしている。表現がそこで終わってしまうこともあるので、声を掛けるタイミングも大切だと思う。子どもの言葉もすべて汲み取れないので、スルーしても良いと思ったらスルーすることもある。</p>
⑤ この保育を通してどんな力が育ってほしいと思うか？	<p>子ども同士で見つけ合う力が育ってほしいと思う。考え方や表現の仕方が違っていても認め合うことができるということを感じてほしい。否定的に考えてほしくないと思う。前向きに認める力が育ってほしい。</p>
⑥ いろいろな年齢を経験していると思うが、この保育のねらいは年齢でどう変わっていくのか？	<p>4歳児は、友だちの姿に刺激を受けていく。その中で、友だちのよさに気づいていく。5歳児は友だちの良さに気づきながら、つながりが深まっていく。自己アピールもしながら、友だちといろいろなアイデアを出して考えることがねらいにもなってくる。友だちと体を使って考えて表現することの楽しさに気づいていく。</p>

振させながら、お互いの囲いを超えて広がっていく」と西(1997)<sup>9)</sup>が指摘する経験を保障しており、このような経験について本山(2018)<sup>10)</sup>は、「動くことを通して他者を感じ共感することを意味しており、子どもたちが、人間関係を形成する上で、欠くことができない重要なものとしてとらえることができます。」と領域「人間関係」の育ちにつながることも述べている。つまり、子どもたちの考え方や表現の仕方は違っても保育者の意図的な刺激を受け、子ども同士で見つけ合う、認め合うことができる力の基礎につながることを期待される。否定的に捉えるのではなく、前向きに他者を受け入れて共に創り出していく「共創」の喜びを感じることができると考えられる。

また、体を使ってモノやヒトとかかわるという体験から子ども自身の自由で柔軟性のある表現が引き出され、子ども自身が発見する自分の新たな部分の出現へと導かれていくのであろう。

「自由な身体表現とはかなり高度な心の働きであり、関連ある経験と知的な好奇心によってなされるものである。それは身体表現の基礎的側面に支えられて存在する。身体表現が自由に行えるのは、過去の有効な体験が手掛かりとなる。過去の有効な体験は、子どもがあらゆるものを模倣によって獲得していくように、身体表現においても模倣は十分に意味のあることなのである。子どもにとって真似ることによって他人との身体の動きに同化できた喜びもある。『模倣の欲求』は表現における大切な側面と考えられる。」と古市(1995)<sup>11)</sup>は述べており、これは、12月の「おもちゃつき」の身体表現遊びでも顕著に見られ、もちが伸びる場面を手や足を上に上げて伸ばす表現が見られ、それが次々に模倣された。3歳児が模倣することで表現する楽しさや、手や足、体の使い方を自ずと学んでいる様子が推察される。

今回、身体表現遊びを継続する中で、保育者にありのままを受け止めてもらい、認められ、自己肯定感を紡いでいく子どもの姿をうかがい知ることができた。この自信を糧に子どもは安心感を持って人とかわり、心の安定を基に自己発揮していく過程が明らかになったと考える。保育者や友だちとイメージの世界やさまざまな表現を共有し、共創することで、考えたり、工夫したりすることが喜びや楽しさへとつながっていくことを確認した。また、身体表現遊びを通してヒトやモノとかかわり、共創する経験を通して、考え、工夫する喜びや楽しさを感じている子どもたちの姿を確認することができた。

3歳児では保育者がモデルとなり、子どものイメージを触発する存在となることが求められる。保育者の振り返りに「もっと身体を自由に動かして感じて一緒に動くということを楽しめるようにしていきたい」と記述があるように、保育者自身が柔軟な感性と身体を獲得していく体験の場が必要であり、保育者自身の経験の積み重ねの大切さを感じている。

今後も、子どもや他の保育者と表現することを生み出す経験や楽しむ場を積み重ねていくことを目指して研究を継続したいと考える。

### 研究分担

対象保育者の指導計画の立案と「保育者の振り返り」の記録用紙の記述は杉浦が担当し、研究の組み立ておよび論文の構成を本山が担当した。

### 謝辞

保育学会における研究発表にご協力いただいた岡崎女子短期大学付属嫩幼稚園堺正司園長先生には心より感謝申し上げます。

### 引用文献

- 1) 厚生労働省『保育所保育指針解説』(平成29年告示)、フレーベル館 p.25
- 2) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』(平成29年告示)、フレーベル館 p.233
- 3) 西洋子(2009)「子ども・からだ・表現—豊かな保育内容のための理論と演習—」市村出版 p.23
- 4) 同上 p.24
- 5) 河邊貴子(2015)「幼児教育 知の探求 8 遊びのフォークロア」萌文書林 p.128
- 6) 山田敏(1994)「遊び論研究」風間書房 pp.4-5
- 7) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』(平成29年告示)、フレーベル館 p.35
- 8) 古市久子(2010)「imagination を展開させる身体表現への導入—絵本『はだかの王さま』をつかって—」東邦学誌第39巻第2号 p.51
- 9) 西洋子(1997)「からだや動きで表現する活動とは、からだや動きで表現するために—障害児・者のアクティビティ向上にむけて—」全国身体障害者総合福祉センター p.13
- 10) 本山益子(2009)「子ども・からだ・表現—豊かな保育内容のための理論と演習—」市村出版 p.17
- 11) 古市久子(1995)「幼児の身体表現活動における諸側面についての一考察」エデュケア第16号 p.19